

高度で安全な医療と、 未来を拓く先進医療を提供

阪大病院 NEWS

No. **62** 号OSAKA UNIVERSITY
HOSPITAL

2016(平成28)年4月25日発行

発行／大阪大学医学部附属病院広報委員会(総務課)

住所／〒565-0871大阪府吹田市山田丘2-15

TEL／06-6879-5021

<http://www.hosp.med.osaka-u.ac.jp>

禁転載(この紙面は再生紙を使っています)

執行部一覧

2016年4月1日現在

病院長	
	野口 眞三郎
副病院長	
人事・医療安全	樂木 宏実
財務・再開発	木村 正
診療体制・がん診療	土岐 祐一郎
ホスピタリティ・アメニティ	越村 利恵
病院長補佐	
小児医療・女性支援	大藁 恵一
研究・中央診療施設	小川 和彦
教育・臨床研究中核病院	竹原 徹郎
広報・中期計画・目標	野々村 祝夫
外部評価・医療情報	松村 泰志
経営・組織改革	吉原 正啓

野口眞三郎・新病院長に聞く

大阪大学医学部附属病院では、個々の診療科において日本トップレベルの高度で安全な診療が行われています。また他の医療機関では見ない緊密な診療科間の連携により、難治性疾患などの患者さんに「最後の砦」として期待され、高い評価を得ています。4月1日より着任した野口眞三郎病院長に、本院の診療・運営などに対する抱負や目標についてインタビューしました。



医療スタッフの連携で チーム医療を推進

大学附属病院の使命は、診療と研究、そして教育です。まず診療に関して本院は、

閉鎖的な一面もあった過去のナンバー内科・ナンバー外科制度から早々に脱却し、多分野にわたる「診療科間連携」を強めてきました。現在、医師同士が専門分野を超えて治療方針を話し合い、お互いにチェックしあうなどのチームワークが順調に進んでいます。

また診療科間や医師同士だけでなく、医師と、看護師・薬剤師・技師などメディカルスタッフ間のコミュニケーションも重視しています。難度の高い疾患の治療や高度先進医療にはリスクも伴うため、さまざまな職種の医療スタッフ

臨床試験を支援し新しい 診断・治療法を

が患者さんを中心とした「チーム医療」を推進し安全性を高めています。また超高齢化社会を迎え、今後予想される社会・医療環境の変化に適応し、本院が今後も高度で安全な医療を継続して提供できるよう、医療の効率性にも十分配慮していく必要があると考えています。

大学附属病院に対しては、難治性疾患などに対する新しい治療法の研究・開発も強く期待されています。本院は早くから、基礎研究の成果を速やかに臨床応用するシステム(トランスレーショナルリサーチ)の構築に取り組んできました。このような先進医療開発

の基盤整備(未来医療開発部)と、長年にわたる成果が高く評価され、平成27年8月、医療法上の「臨床研究中核病院」に認定されました。今後は、日本の臨床研究のレベルの向上のため、種々の臨床試験の支援を積極的に実施したいと思っています。また、新しい医療を早く受けたいという患者さんの思いにこえるため、保険未適用の医療などにアクセスできる「患者申出療養」も今後実施する予定です。

臨床研究中核病院としてのアドバンテージを最大限に活用して臨床試験の支援体制を整備し、また製薬企業などとの連携をさらに強化することで日本の臨床試験を先導し、海外との競争力を高めたいと考えています。そして、一度は大阪を去った製薬企業の本社が再び道修町などに復帰し、大阪復活の起爆剤になってほしいと願っています。

新制度による専門医の 育成にも尽力

本院は医療スタッフの育成や教育にも力を入れています。医師やメディカルスタッフはキャリアパス(キャリア)を積むルート)を通じて専門性とスキルを向上させてほしいと願っています。そして、それが可能となる勤務態勢を調べていきたいと思っています。

また平成29年度から、全ての診療科において「新専門医制度」がスタートします。これは専門医の認定方法を統一し、認定された医師の知識・技術などのレベルを保証しようという制度で、本院における医師教育の重要課題と捉えています。今後、専門医の受け入れ体制を迅速に整備し、研修期間のカリキュラムを含む魅力あるプログラムを作成することで、専門医を志望する多くの医師を集め教育に当たりたいと考えています。

医師やメディカル スタッフの意欲向上を

私は病院長補佐として5年間、副院長として4年間、本院の運営に携わってきました。特に本院における、がん診療体制の整備と強化を最大任務として、国指定がん診療連携拠点病院の承認や、オンコロジーセンター棟の設置などを表現してきました。また本院執行部としての長い経験を通じて、病院における健全財政の重要性を痛感していますが、そのような状況においても予算が必要な分野を見極め、メリハリを付けて投資することで、医師やメディカルスタッフのさらなる意欲向上を図りたいと考えています。特に本院で働く多くの医師は厳しい労働条件のなか、全力で診

療・研究・教育に取り組んでいます。高度先進医療の開発・提供をめざす向学心・向上心に込められるよう、最新機器の導入など研究環境の整備にも尽力したいと思います。また事務職員の皆さんの意見にも十分に耳を傾けて意思疎通を図り、情報を共有しながら病院運営に当たりたいと考えています。

「地域に生き、世界に伸びる」 がモットー

本院は大阪大学の建学の精神である「地域に生き、世界に伸びる」をモットーとしています。地域医療に貢献するのみならず、新しい診断法・治療法を開発し今後も世界に発信し続けたいと思っています。私の座右の銘は「心到天真」。これは、物ごとを偏りのない心で観察し評価・判断するという意味です。この言葉を胸に刻み、新院長として職員一同と力を合わせ、本院の発展に貢献していく所存です。引き続き皆さまのご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

特等室Sがオープンしました

～入院生活をより快適に～



統一された高級感



シャワールーム

入院生活をより快適に過ごしていただけるよう、従来のラインナップに加え、3月1日から特等室Sのグレードをご用意いたしました。デザイナーのセレクトによる内装や家具は統一された高級感があり、白を基調とした壁と木目調の家具に囲まれた、清潔で落ち着いた雰囲気となっております。その他にも、浴槽につかるより体を温めることができるシャワールームとパウダールーム、部屋の奥にはこだわりの応接セットや大画面液晶テレビなど、充実した設備を整えております。ぜひご利用ください。

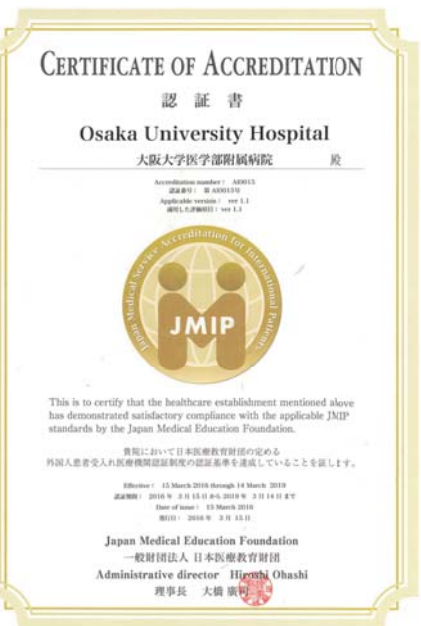
「外国人患者受入れ医療機関認証制度 (JMIP)」に認証されました

大阪大学医学部附属病院では、国際化の進む近年、外国人患者の受け入れ体制の整備に積極的に取り組んできましたが、その一環として平成27

年度に「外国人患者受入れ医療機関認証制度(JMIP)」を受審しました。本認証制度は、外国人患者の円滑な受け入れを推進する国の事業の一

環として厚生労働省が平成23年度に実施した「外国人患者受入れ医療機関認証制度整備」のための支援事業」をもとに策定されたものです。認証団体は「一般財団法人日本医療教育財団」で、日本国内の医療機関に対し、多言語による診療案内や、異文化・宗教に配慮した対応など、外国人患者の受け入れに資する体制を第三者的に評価するものとなっています。

審査は書面調査および訪問調査が実施され、書面調査として「現況調査票」や「自己評価票」を事前に提出した上で、2月25、26日の2日間に



わたり訪問調査が実施されました。訪問調査では、書類調査・担当者合同面接・院内ラウンドなどが行われ、院内ラウンドでは医事課、整形外科外来、放射線部、臨床検査部、東7階病棟、国際医療センターが調査対象となり、各部署での外国人対応のヒアリングや院内表示についての調査が行われました。調査後の講評としては、いくつかの課題も指摘されたものの、全体としては「外国人患者受入れ体制が格段に充実している」との高評価を受け、3月15日付で「認証」となりました。ご協力いただきました皆様方には厚く御礼を申し上げます。審査結果詳細につきましては、次号にて改めてご報告させていただきます。

●調査対象の内訳
＝入院患者さん

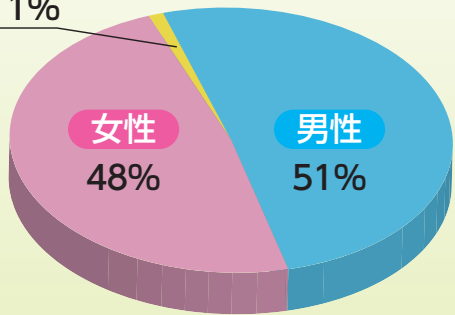
入院患者さん

外来患者さん

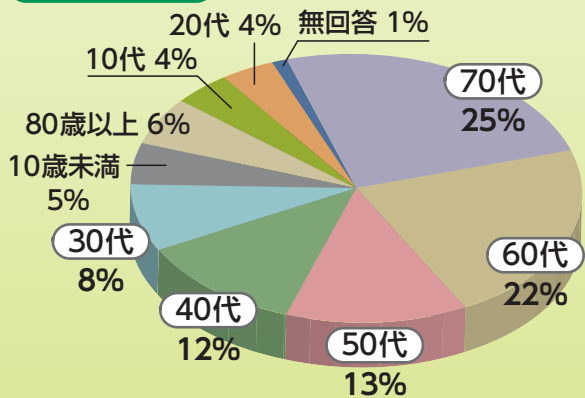
●調査対象の内訳
＝外来患者さん

男女別内訳

無回答 1%



年齢別内訳



●入院患者さん満足度ランキング

ベスト5	1位	職員の身だしなみ	99.0
	2位	家族に対する対応	98.5
	3位	薬剤師の説明や態度、言葉遣い	98.4
	4位	本人や、氏名、病名、薬の確認	98.1
	5位	受けた看護	97.9

ワースト5	1位	トイレや浴室	70.5
	2位	エレベーターや廊下	75.7
	3位	苦情の受け付け場所	76.4
	4位	食事	83.2
	5位	病室の環境	83.6

平成27年度

満足度調査

結果発表！

入院患者さん
平均**92.8%**
(回答数=751)

外来患者さん
平均**90.4%**
(回答数=3,740)

満足！



満足！

入院患者さん、外来患者さんを対象とした満足度調査にご協力をいただき、ありがとうございました。このたび平成27年度の調査結果がまとまりましたので、ご報告いたします。

●調査期間

入院患者さん：平成27年11月の1か月間

外来患者さん：平成27年9月7日～11日の1週間

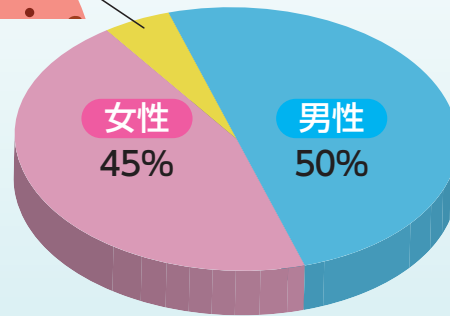
●調査結果

入院患者さんの92.8%、外来患者さんの90.4%の方に、「満足」「やや満足」のご回答をいただきました。満足度の低いご意見は、外来では「会計や診察の待ち時間」「駐車場整備等」、入院では「トイレ設備や清掃」「エレベーター待ち時間」でした。

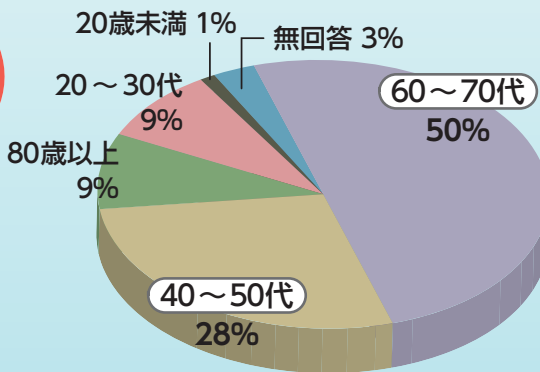
これからも患者さんにとって心地よく、治療に専念できる環境を整えていきたいと考えております。そのために、より多くの患者さんのご意見を伺いたいと思っておりますので、今後ともよろしく願いたします。

無回答 5%

男女別内訳



年齢別内訳



●外来患者さん満足度ランキング

ベスト5	1位	診察室の清潔かつ整理整頓	97.8
	2位	医師のプライバシー配慮	97.1
	3位	看護師のプライバシー配慮	96.9
	4位	看護師の態度や言葉遣い	96.6
	5位	医師の態度や言葉遣い	96.4

ワースト5	1位	待ち時間のお知らせなどの配慮	36.9
	2位	診察後の待ち時間	56.6
	3位	駐車場の広さや数、入りやすさ	59.0
	4位	(診察の予約時間を過ぎてから) 診察までの待ち時間	64.9
	5位	検査までの待ち時間	82.5

平成28年度「病院教授」の称号付与について

病院教授の称号は、大阪大学医学部附属病院における診療・研究・教育の充実のため、特に臨床面で優れた業績が認められる者に対して付与しているものです。

平成28年度は下記の26名に「病院教授」の称号を付与することを決定しました。

番号	診療科等名	氏名	職名
1	呼吸器内科	木島 貴志	講師
2	免疫・アレルギー内科	植崎 雅司	講師
3	血液・腫瘍内科	織谷 健司	准教授
4	心臓血管外科	戸田 宏一	准教授
5	消化器外科(下部消化管、肝、胆)	江口 英利	准教授
6	消化器外科(上部消化管、膵)	瀧口 修司	准教授
7	乳腺・内分泌外科	金 昇晋	准教授
8	眼科	松下 賢治	講師
9	耳鼻咽喉科・頭頸部外科	小川 真	准教授
10	整形外科	村瀬 剛	准教授
11	皮膚科	金田 眞理	講師
12	神経科・精神科	田中 稔久	准教授
13	産科・婦人科	吉野 潔	准教授
14	小児科	小垣 滋豊	講師
15	泌尿器科	宮川 康	准教授
16	放射線診断・IVR科	渡邊 嘉之	准教授
17	臨床検査部	日高 洋	准教授
18	手術部	南 正人	准教授
19	放射線部	田中 壽	准教授
20	集中治療部	内山 昭則	講師
21	輸血部	富山 佳昭	准教授
22	高度救命救急センター	小倉 裕司	准教授
23	MEサービス部	高階 雅紀	講師
24	化学療法部	水木満佐央	准教授
25	薬剤部	三輪 芳弘	准教授
26	未来医療開発部	名井 陽	准教授

※上記の称号付与者の職名等は平成28年4月1日現在のものです。



本院の災害対策マニュアル「地震が発生し、大阪府下で多数の被害傷病者が発生した」と想定で、2月23日に防災訓練を実施しました。

午後2時半に訓練開始の合図とともに、リハビリテーション部内に院長を本部長とする災害対策本部の立ち上げ訓練、病棟及び各部署からの被害状況等を把握する情報収集訓練を行いました。続いて、本院が災害拠点病院としての役割を果たすことを目的に、被害傷病者を受け入れるトリアージ訓練、及び病棟2階看護管理室湯沸室から出火を想定した通報・避難・消火訓練

等を行いました。

訓練終了後の講評では、外部評価者の甲斐達朗千里救命救急センター長から、現状の災害時の組織体制で十分に対応できるか、病棟の機能がどこまで維持できるのか、そのことについて共通認識はできているか等について、今後の見直しに役立つ講評をいただきました。

なお、今後は、本院も多大な被害を被った状況において、いかにして病院機能を継続するかという点を重視した、事業継続計画(BCP)の作成に着手しております。

平成27年度防災訓練を実施

平成28年度 優秀標語表彰式

平成28年度の標語が決定

接遇・マナー向上目指して

3月10日、病院長室において、倉病院長から4名の優秀標語作成者に表彰状と副賞が授与されました。患者サービス検討委員会では、職員の一人ひとりが患者さんの立場に配慮できるよう努めるとの主旨で、接遇・マナー向上に関する標語を掲げております。

このたび、院内に標語を募集し、患者サービス検討委員会で検討の結果、次のとおり優秀作品が決定いたしました。なお、応募者全員に参加賞が渡されております。

(所属は表彰当時)



1～3月期

10～12月期

7～9月期

4～6月期

「患者さん 一人ひとりに 思いやり」

「『お大事に』 その一言を大切に」

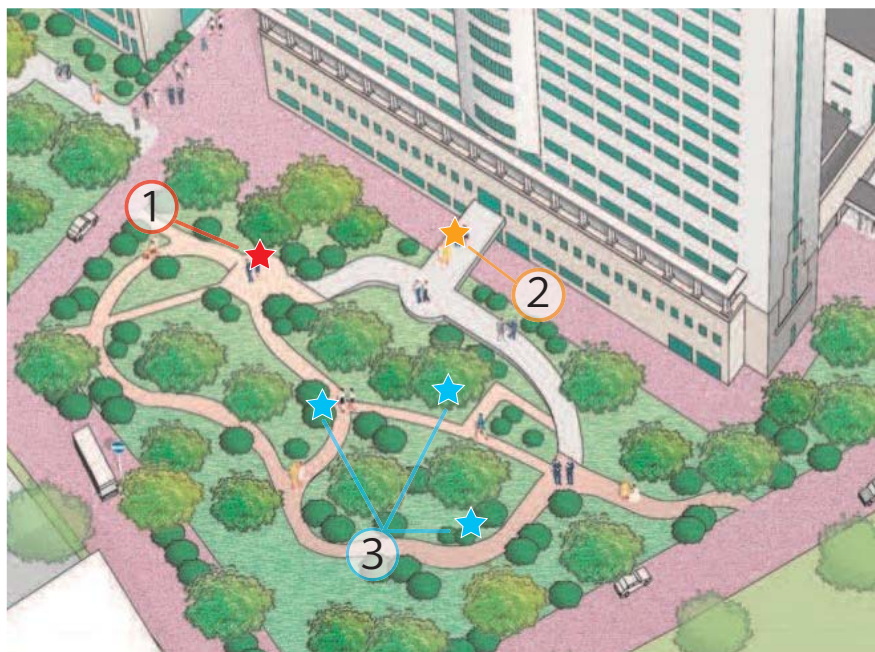
(医事課 田中洋子)

「安全な医療のためには再確認」

(看護部 前田正美)

「小さな気遣い 大きな信頼」

(神経科・精神科 小笠原将之)



上イラスト① ベンチを新調しました。



上イラスト② 通路の段差をなくしました。



上イラスト③ 3カ所になった屋根付きの休憩所。

日頃より、患者さんにご好評いただいておりますホスピタルパークは、より快適に、憩いの場、リハビリの場としていただくため、リニユアルいたしました。

等も通りやすいよう、床タイルの段差を解消し、ホスピタルパーク内の老朽化していたベンチは新しいものに取り換えました。1カ所だった屋根付きの休憩所は、2カ所増の計3カ所となり、日差しの強い日や、空いている椅子がない

くお困りのことも、少なくとも期待しております。さらに、防犯強化のため、カメラの設置や、外灯の更新も行いましたので、ホスピタルパークをこれからも安心してご利用ください。



外灯も更新しました。

新診療科長等ごあいさつ



●医療技術部長
よしだ きよし
吉田 靖

医療技術部は、専門性の高い医療技術を提供する医療資格10職種が所属し、検査部門、放射線部門、リハビリ部門、臨床工学部門で構成され、高度先進医療を支援するために一体的に組織化された部門です。質の高い安全な医療を支援するためには、職種間相互の特性を有機的に共有し、連携を高めることにより、強いベクトルへの融合を達成することが必要だと認識しております。そのために先達の努力による実績に加え、部門間の横断的な技術協力を実行し、緊密で効率性の高い協働体制により、部門の存在意義をさらに定着させて、病院への貢献度を高めていきたいと考えております。

(平成28年4月1日就任)



●小児医療センター長
おくやま ひろおみ
奥山 宏臣

小児医療センターは、平成20年2月に小児内科部門と外科部門の診療を統一して設置された連携診療部門です。内科系および外科系のスタッフが力をあわせて、より充実した小児医療を目指します。専門性の高い先進医療だけでなく、地域連携や救急医療にも対応しております。病棟6階のフロアは明るい森のイメージで統一され、中央の共通スペースにはプレイルームもあり、子ども達が快適な入院生活をおくれるように配慮しています。より開かれた小児医療センターとして発展するよう努力致しますので、引き続きご支援をよろしくお願い致します。

(平成28年4月1日就任)



●オンコロジーセンター長
どき ゆういちろう
土岐 祐一郎

4月1日より野口現病院長の後任としてオンコロジーセンター長に就任いたしました。当センターの活動は昨年9月のオンコロジーセンター棟の開設に伴い強化され、外来化学療法、カンサーボード、緩和ケアチーム、患者支援相談室、患者交流会、各種セミナー開催など、診療科横断的ながん診療体制の中心的な役割を果たしています。特に外来化学療法については従来の19床から42床へ増床し、一日受け入れ件数も最大80名程度可能です。水木満佐央准教授、磯橋文明准教授、荒木啓子師長の3人の副センター長の体制で包括的ながん診療を行っています。

(平成28年4月1日就任)



●脳卒中センター長
もちづき ひでき
望月 秀樹

脳卒中センターは、24時間体制で脳卒中患者さんを受け付けております。高度救命救急センターを窓口として、脳神経外科、神経内科・脳卒中科の医師が対応します。老年・高血圧内科、放射線部、リハビリテーション部、看護部、保健医療福祉ネットワーク部とも緊密に連携して、できるだけ早い患者さんの社会復帰を目指します。大学病院での高度な臨床を行い地域医療に貢献し、脳卒中診療に対する人材育成も推進したいと思っております。よろしくお願い申し上げます。

(平成28年4月1日就任)



●疼痛医療センター長
ふじの ゆうじ
藤野 裕士

4月1日から疼痛医療センター長を拝命致しました。疼痛医療は麻酔科医の周術期の鎮痛薬の使用経験や神経ブロックなどの技術をもとに積極的に推進してきた歴史があります。現在の当センターは麻酔科および疼痛医学寄附講座、神経内科・脳卒中科、脳神経外科、整形外科など幅広い診療科による協力体制のもとで運営されており、難治性疼痛患者の診療や緩和医療への関与など病院機能に不可欠な役割を果たしています。センター長として疼痛医療センターのさらなる発展に向けて尽力してまいりたいと考えておりますので、よろしくお願い致します。

(平成28年4月1日就任)



●総合診療科長
らくぎ ひろみ
樂木 宏実

当科は近隣の医療機関からご紹介いただいた、診断困難あるいは複数の問題を抱えている患者さんや、専門診療科が特定できない初診の方を中心に診療しています。より幅広い病態に対応できるように、入院での精査・加療の体制も整えています。最終的な診断、治療に際しては各専門診療科にお願いをすることもありますが、高度先進医療を推進する大学病院に貢献してまいりたいと考えております。新専門医制度の開始を間近に控え、本年4月からは総合診療科と新たに銘打ち、さらに診療の充実にも努めてまいります。

(平成28年4月1日就任)

PHOTO

ホスピタル
ミニ・ニュース

TOPICS

春のミニコンサート

市民フォーラム
「やさしい未来医療」を開催

活発な質疑応答も行われました

2月28日にグランフロント大阪ナレッジキャピタルにおいて、医療法上の臨床研究中核病院に承認後、「やさしい未来医療」と称して、はじめての市民フォーラムを開催しました。

今回のフォーラムでは、金倉譲病院長の開会の挨拶に始まり、山本洋一未来医療副センター長の「治験・臨床研究の現状と患者さんを守る仕組み」、澤芳樹医学系研究科長の臨床研究の成果(実例)報告として「心臓の再生医療～心臓は甦るのか～」など、未来医療をテーマにした講演をその他にも行い、多くの市民の方が熱心に耳を傾けるなか盛況のうちに幕を閉じました。

これからも本院は、やさしい未来医療の実現に向け、「臨床研究中核病院」として多くの成果を発信していきます。

治験コーナーリニューアル
臨床研究相談窓口を新設

このたび、外来棟3階の「治験コーナー」をリニューアルし、3月29日から「治験コーナー・臨床研究相談窓口」として、運用を開始しました。

昨年8月に「臨床研究中核病院」に承認されたことで、質の高い臨床研究及び医師主導治験の実施や管理の中心的な役割を果たすべく、これまで相談の対象であった治験のほか、臨床研究についても相談の対象を広げております。

また、4月から施行されている「患者申出療養制度」の相談窓口として、患者さんからの申出に適切かつ迅速に対応し、次世代のより良質な医療の提供を目指してまいります。

放射線部更衣室リニューアル

放射線部の更衣室がリニューアルしました。壁紙にキャラクターや花の模様をあしらい、華やかになっています。また、部屋ごとに色が分けられているので、検査後に戻ってくる部屋がわかりやすくなっています。



室内には手すりを完備し、車いすの患者さんなどがスペースを確保できるよう、壁面に折りたためる椅子も備え付けました。

本院はこれからも患者さんにやさしい環境づくりを進めてゆきます。



敷地内はすべて
禁煙です!

ご協力よろしくお願いします

耳鼻咽喉科・頭頸部外科は、腫瘍、難聴、めまい、鼻・副鼻腔、音声・嚥下・気道、幼児難聴の6領域で専門外来を設け、耳、鼻、副鼻腔、口腔、咽頭、喉頭、頸部などに関する一般診療と高度な先進医療を行っています。

腫瘍外来は、年間約200例の頭頸部がんを診療しています。手術・放射線・化学療法を最大限に活用し、発声や嚥下などの機能をできる限り温存するよう努めています。また紹介状患者さんを、その日のうちに腫瘍専門医が診察し迅速な検査を行うなど、病気の進行や患者さんの不安に配慮した体制を整えています。

難聴外来は、慢性中耳炎、難治性の真珠腫性中耳炎、耳硬化症などの手術治療を年間200例以上行っています。また高度難聴の患者さん、特



耳鼻咽喉科・頭頸部外科のメンバー

耳鼻咽喉科
頭頸部外科聞く・話す・食べる・味わう・匂うなど、
日常生活に欠かせない機能を改善

に幼・小児に対する人工内耳の埋め込み手術には実績があり、日常のコミュニケーションが不自由なくできるような両耳への装着なども行っています。

めまい外来は、メニエール病などの内耳機能と関連しためまいを中心に、幅広い診療を行っています。めまいの診断には目の揺れを診る眼診が欠かせませんが、来院時に発症しないケースも多く、目の揺れを自動的に記録する機器のレンタルなどにも試験的に取り組んでいます。

鼻・副鼻腔外来は、年間100例以上の鼻・副鼻腔手術を行っています。また最近発見された難治性の好酸球性副鼻腔炎に対して、術前・術後のケアも含めた高度な内視鏡手術を実施しています。副鼻腔の構造は複雑で脳に近く手術のリスクが大いなのです。手術のリスクが大きいのが、鼻の構造が複雑で脳に近く手術のリスクが大いなのです。手術のリスクが大きいのが、鼻の構造が複雑で脳に近く手術のリスクが大いなのです。

当診療科の最大の目標は、「聞く・話す・匂うなど日常生活に欠かせない機能を改善し、健康な日常生活を取り戻していただくこと。地域の病院・診療所とも連携して日本有数の治療を提供していきますので安心して来院してください」と福角隆仁助教(耳鼻咽喉科・頭頸部外科)は話しています。

循環器疾患の患者さんの「最後の砦」
TAVI治療では国内最多の実績

ハートセンター
近年、心臓を中心とした循環器疾患の重症化に伴い、より高度な診療が求められています。ハートセンターは平成19年、循環器内科・心臓血管外科が一体となり、一人ひとりの患者さんに最適な、総合的かつ高水準の医療を提供するため誕生しました。

緊急症例から慢性疾患まで幅広く対応していますが、内科・外科の強力な連携を生かし、特に力を入れているのが心臓弁膜症と重症心不全の診療です。

今後の超高齢社会で増加が予想される大動脈弁の弁膜疾患は、外科的な人工弁置換手術が延命効果のある唯一の治療とされてきました。しかし年齢によるリスクや合併症を考慮して手術を断念される患者さんも少なくありません。

者さんも少なくありません。当センターは平成21年、従来の手術と比較して患者さんの体への負担が少ない「経カテーテル的大動脈弁置換術(TAVI)」を日本で最初に導入し、平成27年度までの累積症例数は327例と国内最多となっています。平成25年10月に保険診療の承認も得られ、TAVIの中核施設として、より多くの経験を蓄積し、さらに安全性を高めていきたいと考えています。

重症心不全の患者さんに対して、内科・外科の垣根を越えて協力し合い、薬物治療、心室同期治療、不整脈治療、レーゾン治療、僧帽弁修復術、補助人工心臓植込み手術などを実施しています。また本院は心臓移植認定施設でもあり、平成27年度までの移植件数は76例に及びます。



信念を語る坂田ハートセンター長